

16 胸腔鏡による癌性胸膜炎の診断：胸腔鏡が確診を得るために有用であった症例の検討

川崎医科大学附属川崎病院内科(Ⅱ)

○木村 丹，松島敏春，中村淳一，小橋吉博，安達倫文，田野吉彦

【目的】私どもは昭和62年7月以降癌性胸膜炎の診断に胸腔鏡を用いた胸膜生検を実施している。胸腔鏡下胸膜生検の有用性については，既に報告されて来ているが，今回は本検査が癌性胸膜炎の診断に重要な役割を果たした症例について検討した。

【対象および方法】過去6年間に胸腔鏡下胸膜生検を施行した癌性胸膜炎29例のうち他の検査法が診断に有用でなく，本検査により初めて癌性胸膜炎と診断され得た症例を対象としてその臨床像を検討した。

【結果および考察】胸腔鏡下胸膜生検の陽性率は83% (24/29)であった。このうち胸膜生検により初めて病理組織診が得られた症例は20例，さらに喀痰・気管支鏡下採取物・胸水細胞診のいずれも陰性で胸膜生検により初めて癌性胸膜炎と確定診断され得た症例は5例(癌性胸膜炎全体の9%)であった。5例のうち4例は初診例，1例は臨床的に肺癌と診断し治療中の症例で，その組織型は肺腺癌1，肺小細胞癌1，悪性胸膜中皮腫1，原発臓器不明の腺癌2であった。また4例に腫瘍マーカーの上昇は認めなかった。胸腔内の観察では，3例が限局性病変，2例が臓側胸膜にびまん性に拡がる病変を認めた。本検査により，癌性胸膜炎としては比較的早い時期での診断が可能になると考えられる。

18 原発性肺癌における胸腔鏡下肺部分切除術の有用性—扁平上皮癌症例を中心として

三重大学胸部外科

○木村 誠，草川 均，水元 亨，林 丘，並河尚二

【目的】原発性肺癌における胸腔鏡下肺部分切除術の有用性について扁平上皮癌症例を中心に検討した。

【対象および方法】1957年から1993年5月までの当科における原発性肺癌手術症例980例のうち胸腔鏡下肺部分切除が可能と判断できた，胸膜直下あるいは術前に腫瘍の部位の同定可能であった胸膜近傍の扁平上皮癌でC-T1N0M0かつP-T1N0M0の25例を対象とした。また肺癌に対する部分切除の有用性をみるため根治性を目的とした縮小手術例20例とStage I 肺癌症例に対し定型的肺葉切除を施行した200例との予後を比較した。

【結果】根治性ありとされた部分切除例の5年生存率は74%と葉切除群とまったく同じ良好な成績であり，また部分切除群のなかで6例の扁平上皮癌に再発癌死例はなかった。さらに胸腔鏡下肺部分切除が可能と判断できたC-T1N0M0かつP-T1N0M0の25例の扁平上皮癌例の5年生存率は肺葉切除例1例を癌性胸膜炎で失ったのみで92%と極めて良好であった。また25例中部分切除例12例(根治性目的6例，High riskのため6例)に癌死例はなかった。

【結語】以上から胸膜直下あるいは術前に腫瘍の部位の同定可能な胸膜近傍のC-T1N0M0かつP-T1N0M0の扁平上皮癌に対する胸腔鏡下肺部分切除術は有用な術式であるといえる。

17 胸腔内腫瘍性病変に対する胸腔鏡の有用性

浜松医科大学第一外科¹、同第二内科²

○影山善彦¹、鈴木一也¹、野木村宏¹、小林 亮¹、豊田 太¹、原田幸雄¹、佐藤篤彦²

【目的】胸腔内腫瘍性病変に対する胸腔鏡の有用性について検討を行った。

【対象】1993年6月までの2年8ヵ月間に開胸手術の適応となった170例(腫瘍性病変59例)に対し胸腔鏡による観察を行い，100例(同22例)に胸腔鏡下手術を施行した。22例の内訳は肺末梢性腫瘍11例、胸壁腫瘍4例、縦隔腫瘍4例、縦隔リンパ節腫大2例、肺癌1例であった。

【結果】肺末梢性腫瘍は、転移性肺腫瘍5例、過誤腫2例、結核腫1例、肺癌1例、肺内リンパ節腫大1例、その他1例であった。これらの内5例は胸膜面より腫瘍を確認できず、小切開を追加し切除し得た。縦隔腫瘍では大血管に接した1例に小切開を追加し摘出した。縦隔リンパ節および胸壁腫瘍はいずれも特に問題なく切除・摘出された。部分切除後術中迅速病理診にて肺癌と診断された1例は、標準開胸に変更し肺葉切除を行った。以上の症例に関して重篤な合併症は認めなかった。

【考案】胸腔内腫瘍性病変に対し、開胸直前に行う胸腔鏡検査は侵襲が少なく、短時間で施行でき、診断・治療方針を決定する上で有用な補助手段である。また胸腔鏡下手術はその適応を適切に判断することにより、侵襲の少ない術式と思われる。

19 当院における胸腔鏡手術例の検討

国立がんセンター東病院呼吸器外科¹、同呼吸器内科²、

○西村光世¹、永井完治¹、高橋健郎¹、吉田純司¹、田中浩一¹、西脇裕²、児玉哲郎²、

【目的】当院において胸腔鏡手術症例の術後病理診断を中心に胸腔鏡手術の適応について検討した

【対象】1992年10月より1993年6月までの胸腔鏡手術予定例23例中胸腔鏡手術のみ施行した16例について検討した。

【結果】胸腔鏡手術の適応は気管支鏡下生検及び、経皮針生検にて確定診断の得られなかった、肺野小結節病変で、23例中7例は胸腔鏡下に腫瘍が確認できず小開胸にて直接触診にて確認し切除した。のこり16例が胸腔鏡のみにて切除された。年齢22才から82才で平均54.2才で腫瘍の大きさは0.4cmから2.2cmで平均1.0cmであった。術後病理組織別では肺内リンパ節5例、炎症4例、結核腫4例、腺癌4例、過誤腫2例、胸膜1例、MFH1例、腺腫1例、骨肉腫1例、であった。術後合併症は3例あり、2例は肺瘻で1例に気胸がみられたが重篤なものはなかった。以上のように23例中4例が肺癌で術前確定診断のつかない小結節病変には、胸腔鏡による肺部分切除が今後とも重要な診断手段となると考える。